

---

# シナモントースト

ネクタイおやじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シナモントースト

### 【Nコード】

N3618X

### 【作者名】

ネクタイおやじ

### 【あらすじ】

長男の結婚を控えた青山家と、その結婚相手の秋野家の25年前に起こった出来事。

そして、現在の状況に対する苦しみと、そこから抜け出そうとする家族の葛藤を描いたヒューマンストーリー。

## 朝

恭子【きょうこ】は鏡台の前に座り、母の香奈子【かなこ】が髪の毛を夜会巻きにするのを待っていた。

自分でもできるが、香奈子がやった方がいつも気に入った上に香奈子は恭子を着飾るのが好きだった。

今日は、午後から弟の裕【ゆたか】の結納がある。

本来であれば座敷のある料亭で食事をするのであろうが、今日は軽井沢にある青山家の実家でやることになっている。

青山夫妻が経営しているブライダルサロンを秋野一家に見せるのが最大の目的だ。

ふたりの挙式披露宴を自社所有の邸宅で行いたいと青山夫妻は考えていたからだ。

そのためにも、婚約相手の秋野一家を青山家に招待し、週末を利用して軽井沢観光も含めてもてなそうとしているのだ。

「マーマ！美優【みゆ】のチェックのリボン知らない？」

妹の美優がそう言いながら、ノックもなしに私の部屋に入ってきた。「さあ、自分でどっかにやっちゃったんじゃない？ママは知らない。」

7年前に実家をでた恭子は、可愛いとは思うものの11歳の美優のことはよく知らない。

そして、弟妹たちが、恭子が実家に帰ってすぐは恭子が帰ったことを喜んでくれるのに、しばらくたつと香奈子を独り占めしてしまう恭子のことを疎ましく思い始めるのを知っていた。

今の美優も、リボンのことは本当はどうでもよくて、香奈子に甘えに来たのだ。

「美優ちゃん、リボン探して来なさい。」

「美優も恭子ちゃんみたいにして。」

「いつもみたいにならないで、アップにするの？」

香奈子が聞くと、美優はこっくりと頷いた。

「恭子ちゃんのが終わったらやってあげるから、ちょっと待ってて。太【ふとし】はいい子にしてる？」

「悪い子にしてる。」

「イタズラ盛りだからね。美優、ふたりのお着替え終わっているか見てきてちょうだい。」

「わかった！」

美優は、小走りに部屋を出ていった。

ふたりというのは、7歳の星空【るきあ】と2歳の太のことだ。

昼食会は12時からの予定になっていて、すでに10時半。

香奈子は段取りで焦っていた。

恭子と美優の髪の毛を結ったら、自分も着物を着なければいけない。11時過ぎには料理が届き、サービスマンとシェフがひとりずつ披露宴会場から派遣されてくる。

サービスマンは披露宴会場の副支配人のひとりで勤続15年の岡部が、シェフはフレンチのスーパーシェフで、昨年フランスから帰国したのを採用した北村が担当することになっていた。

夫の利明【としあき】と15歳の遙【はるか】は、朝からテニスに行ってまだ帰ってきていない。

こんな日だけでも休んで欲しいとは思うものの、遙は中学の1年では県代表、2年と3年では全国大会まで残っている。

受験勉強でストレスも溜まっているので、週末だけはしっかりとトレーニングをさせてやりたいと夫婦で考えていた。しかし、いくらなんでも遅すぎる。

利明は、予定をくるわせて香奈子をイライラさせることがしばしばあった。

「香奈ちゃん、イライラしてるでしょ。」

「まあね。いつものことだけど。」

「あんまり溜め込むと、寿命が縮んじゃう。」

恭子の髪の毛が結い上がったので、今度は香奈子が座って恭子が髪の毛を結っていた。

「もう、とつくに縮んでいるんじゃないかな。こんなの毎日よ。」

事実、兄弟の中でも恭子以外はそれほど聞き分けが良くはない。

「でも、みんな 大人になればわかるようになる。もう少し頑張れば、仕事も子育ても引退できるわ。」

「裕がもつと頑張らないとね。」

「あと、樹里【じゅり】さんも…。やってもらうことがたくさんある。彼女に務まるかしら。」

「無理にやらせることないよ。あと2年もすれば綾音【あやね】も帰ってくるんだし、会社は私達に任せて香奈ちゃんはゆっくりして。」

「そうできればいいんだけどね。」

美優が、バーバリーの赤いワンピースに着がえて、リボンを持って戻って来た。

「清美【きよみ】さんが、綻んでるのを縫ってくれてたんだって。」と嬉しそうに差し出した。

「良かったわね。」

「ママ、やっぱりいつもみたいにして。」

「いいわよ。」

香奈子が左に少しずれて、ひとつの椅子に美優と並んで座った。

香奈子は、美優の髪の毛を真ん中でふたつに分けて耳の横でまとめてリボンで結んだ。

## 昼食会

11時5分になって、ようやく夫の利明【としあき】が遥【はるか】を連れて帰ってきた。

香奈子【かなこ】は、髪の毛が仕上がり着物を着付けているところだった。

「恭子【きょうこ】ちゃん、遥の着替え見てきてちょうだい。」  
「着物？」

「あの、綾ちゃんの緑のワンピース。」

「物持ちいいわねえ。綾音【あやね】のも美優のも私のお下がりじゃない。」

「大事に着せてるからね。ママの今日のお着物だって、お義母さんのお下がりのよ。」

「香奈ちゃんって、あんまりパパとタイプ似てないよね。」

「だからいいのよ。」

「そんなもん？」

「そんなもん。」

恭子は腑に落ちないような顔のまま、遥の部屋に向かった。

「遥、入るよ。」

遥の部屋のドアを開けると、遥は黒のロングドレスを着て化粧をしていた。

「遥、ママが今日は緑って…」

「最近筋肉ついちゃって、黒だと細く見えるからこっちにしたの。」  
確かに、遥はスポーツマンらしいガツシリした体型をしていた。

身長も高いので、着こなしの難しいロングスカートも上手く着こなせる。

身長の低い恭子には、羨ましくなるくらいだ。

「指輪、もらってきたよ。」

「指輪？」

「聞いてない？樹里【じゅり】さんの婚約指輪、ママのをあげるんだって。クリーニングに出していたから受け取ってきたよ。」

「そうなんだ。どの指輪あげるの？」

「さあ、私中は見てないから。でも、後で見られるんじゃない。」

恭子には、香奈子のは自分のものだと言っ思い込みがあった。

それは、自分が長女であり母に一番に愛されている自信があったからだ。

それは、香奈子の自分に対する負い目も含まれていた。

だから、何も言わずに香奈子の装飾品を持ち出すことがしばしばあった。

恭子は、その指輪が気に入っていたルビーのものではないかと思ったのだ。

結納が始まれば時期にわかることではあるが、どうしても早く知りたかった。

「髪型、このままでいいでしょ。」

「そうねえ、ママと同じ所で切ってるの？」

遥は、微笑んただけで返事はしなかった。

YesともNoともとれる反応であったが、遥も恭子もどちらでも良かった。

遥の着替えが終わって昼食会が執り行われるテラスに向かうと、秋野一家を迎えに行っている裕【ゆたか】以外は全員揃っていた。

美優【みゆ】は、朝から遥と出掛けていた父の利明を独り占めにしようとして、流行りのアイドルのダンスを踊っていた。

流星【るきあ】と太【ふとし】が、それを真似しようとしているがなかなか上手く踊れない。

玄関の方から、車のエンジン音が聞こえる。

裕が秋野一家をつれて戻って来たようだ。

ゲストルームに荷物を入れてから、秋野夫妻、樹里、裕がテラスにやって来た。

「秋野さん、お待ちしていました。」

「こんな田舎町までわざわざご足労頂きまして、お疲れではないですか？」

利明と香奈子が客人をいたわった。

「いや、軽井沢は思っていたよりずっと近いですね。新幹線に乗ると1時間ですから。」

「ええ。東京で仕事がある時、単身だったら電車の方が便利ですよ。いつも、妻や子ども達も連れていくので車になってしましますが。」

「東京にも、戸建をお持ちだとか。」

「昔、住んでいた家です。今は、長女と次男が使っています。」

「お子さんが8人いると聞きました。大変でしょう。」

「1人でも8人でも一緒ですよ。家族を紹介しましょう。妻の香奈子です。長女の恭子、三女の遥、四女の美優、三男の流星、四男の太です。次女はアメリカに留学していて、次男は東京の大学にいます。」

「東大とお聞きしています。」

「そうです。子どもというのは、なかなか親の思うようには育たないものです。」

利明の言葉に、秋野恒太は違和感を感じた。

自分の息子が東大に行っていて自慢する親ばかりだと思っていたが、利明は息子の進路に満足していないようなそぶりだった。

謙遜しているのとも違うその口調に恒太は少し苛立ちを覚えた。

結納は青山夫妻と新郎となる裕、秋野夫妻と新婦となる樹里で、庭にある茶室で行われた。

その時に樹里に贈られた指輪は、5カラットのエメラルドをダイヤで花柄に縁取ったものだった。

結納を済ませた樹里の指に輝いているのがルビーでなくて、恭子は

一安心していた。

昼食会ではふたりの披露宴について大まかに話し合っていたが、当日に池袋から送迎バスを出すということで軽井沢にある青山家のサロンで挙式披露宴をすることに落ち着いた。

昼食会にはプロヴァンス料理のフルコースを用意したが、流星もとも最後まで席についていられず香奈子は途中で退席した。

そんな時に、いつも客人の話相手するのは遥の役目だった。

どちらかというと内向的な香奈子と恭子とは違って、遥や美優はどうやったら人に可愛がられてもらうのかを良く知っていた。

## BAR

昼食会が14時に終わり、それぞれ動きやすい服装に着替えて二台の車で雲場ノ池に向かった。

紅葉の雲場ノ池で鴨と写真を撮ってから、旧軽銀座を案内した。

夕食は、旧軽井沢にある青山夫妻が所有する中華料理店に入った。

この店は中華料理と信濃ワインとのマリアージュを打ち出していた。北京ダックを注文すると、その鳥の肉を使ったスープと炒飯が付いてくる。

あとは小皿料理で青菜と海鮮の炒めとエビチリ、子ども達のために蟹玉を注文した。

小皿料理を食べているときにはシャルドネを飲み、北京ダックが運ばれてくると黒葡萄で作ったヴァン・ド・ルージュを飲んだが、香奈子【かなこ】と裕【ゆたか】は運転しなければならなかったため飲まなかった。

食後にアイスクリームとゴマ団子を青茶で頂いた。

その後、千ヶ滝の温泉でゆっくり暖まってから、北軽井沢の自宅に戻った。

それぞれ自室に戻っていったが、恭子【きょうこ】はキッチンからチーズを塊のまま持ち出して、ひとりでバーで飲んでいた。

飲み足りなかった訳ではないが、香奈子と裕が後で来るのを待っていたのだ。

扉の開く音がして、振り返ると、予想もしていない相手が立っていた。

秋野恒太【こうた】は、気まずい気持ちを取り繕うとしていたが、隠しきれていなかった。

沈黙を破ったのは恭子だった。

「何か飲みますか？」

「ああ。それじゃあ、ビールをもらおうかな。」

恭子は立ち上がってカウンターの中に入り、栓を抜いた瓶ビールと冷えたタンブラーを持って戻って来た。

隣り合わせに並んで座り、恒太のグラスに恭子がビールを注いだ。

「乾杯。」

「…乾杯。」

恭子は、自分のフルートグラスを恒太のグラスに軽く当てた。

恭子の唇で、発泡酒の泡がシュワシュワと弾けた。

「それは…、シャンパン？」

「クスッ。これは、美丈夫っていう微発泡の日本酒です。」

恭子は、自分のグラスを恒太に差し出した。

「日本酒！？」

バーには廊下から入る扉とは別にキッチンに通じる扉があった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3618x/>

---

シナモントースト

2011年11月13日19時28分発行